

2月の予定

- 3日 ビデオ&詩篇朗読&書き取り
2月生まれの人に祝福のお祈り
- 10日 きっず・らんど
- 17日 ビデオ&詩篇朗読&書き取り
- 24日 お話&詩篇朗読&書き取り

チャレンジ! 暗誦聖句

人がその友のためにいのちを捨てるといふ、これよりも大きな愛はだれも持っていません。

ヨハネの福音書 15章 13節

教科書にでるクリスチャン偉人伝

『杉原千畝』

杉原千畝は、1900年1月1日岐阜県の八百津町に生まれました。父好水は、千畝を医者にしたかったのですが、得意の英語を生かした職業につきたかった彼は、父の薦める医学専門学校の入学試験で白紙の答案を提出し、父に無言の抵抗をしました。激怒した父は、彼に家を出て働くことを命じ、彼は働きながら、早稲田大学の英語科に入学しました。様々なアルバイトをしながら大学に通っていたのですが、やがて金銭的に困窮し、学びを続けていくことができなくなりました。そんな時、彼は、官費留学生の募集の新聞記事を目にします。そして猛勉強の末、難関を突破し満州のハルビンでロシア語の勉強に励むことになったのです。千畝は、日本の外交にはロシア語のスペシャリストが不可欠と考え、努力に努力を重ね、まるでロシア人のように堪能に話すことができるようになりました。24歳で外務省に入り、ハルビンの総領事館で働き始めます。北満鉄道をソ連から買い取る時には、千畝の綿密な調査が役立ち日本に有利に交渉を運びました。彼の手腕は高く評価され、ソ連の動きを探るため、1939年、リトアニアのカウナスに領事館開設するよう命じられます。1940年7月18日、カウナスの日本領事館を、大勢のユダヤ人が取り囲みました。彼らは、ナチスから逃れるため、シベリアを越え、日本を経由し、安全な国へ移り住もうとしていました。そのために必要な日本の通過ビザを求めて、やってきたのです。千畝は、ビザの発行許可を得るため再三電報を打ちました。『人道上、断ることはできない』と書き添えて。しかし日本政府の答えは『不可』でした。千畝は一晚悩んだ末、妻の同意を得て、政府に反し、ビザの発行を決意します。家族の命を危険にさらすことになるかもしれない。けれども、死に瀕しているユダヤ人たちを見捨てることはできませんでした。早朝から深夜まで、昼食もとらず、彼はビザを書き続けました。リトアニアがソ連に支配されたため、領事館の閉鎖と退去の命令が出ていました。彼は領事館を出た後も、滞在先のホテルで許可証を書き続けました。列車に乗っても発車の間際までひたすらに書き続けました。その数2000枚以上。家族毎に1枚なので、このビザに救われた命は6000人以上と言われています。戦後、帰国した千畝は外務省を解雇されましたが、抗議もせず、家族のために貿易会社などで黙々と働きました。1968年、千畝は、ビザによって生き延びたユダヤ人と再会します。そして、1985年イスラエル政府から『諸国民の中の正義の人賞』を受賞しました。日本政府からは2000年に公式の名誉回復が行なわれています。



加古川福音キリスト教会日曜学校部 発行
牧師 楠橋 清隆・喜代子
TEL 079-425-1406

編集後記

日本のこともたちに、将来の夢はなあに?と聞くと

「野球選手!」

「ケーキ屋さん!」

「学校の先生!」

などと元気な答えが返ってくることでしよう。

しかし、アフリカや中東など、

命の危険と隣り合わせの状況で

生きている子どもたちのなかには

「生きていたい!」と

答えることもがたくさんいるのです。

将来、生きていることが、

あたりまえではないのです。大人になれることが、あたりまえではないのです。

大切な命が軽んじられている国が今なお多くあることに、心が痛みます。

千畝に関する文献をいくつか読んで、命を引き継ぐ尊さを思いました。

六千人の命のビザとよく言われますが、その六千人からまた新しい命が、次々と誕生しています。

「私のしたことは外交官としては間違ったことだったかもしれない。

しかし、私は頼ってきた何千人もの人を見殺しにすることはできなかつた。そして、それは正しい行為だったと信じている。」

キリスト者であった彼の決断に感動を覚えるとともに、真の正義が行なわれるようにと祈らずには

おられません。